

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	選後に
Author(s)	上田, 英夫
Citation	龍南, 191: 105-106
Issue date	1924-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8757
Right	

作は先人の糟粕を嘗めるものに過ぎない。

『水泳の歸途』 水泳場の描寫を讀んだ私は遠慮なく此作者をノンセンスな男であると云へる、その文句は發表を許るされぬがどうしてあんな馬鹿なことが書けたものかと思々しく思ふ、水泳の歸途蛇の殺されてゐるのを見て無害なもの、虐殺を悼み同じ殺されるなら何故人間に反抗しないかと人間を呪ふあたり一寸變態心理の人のやうな氣がする、それで半殺しになつた蛇を谷間に投げ込んでやつていゝ事をしたと思つた夜の夢枕だ、たあいない。

『戯曲織之助の死』 此一幕二場を讀んで此作者の未だ書いた物を發表する資格に達してゐない事をつくづく感じた頭腦も朦朧としてゐるやうに考へる、一々批評を加へたら限りがないからお氣の毒ながら黙葬する。

『振り上げられたる大蛇』 全く開いた口がふさがらないと取りとめもなく心中を往來するもやもやを書いた文章に掴み所のない事作者の言葉通り然り終の數頁だけ少しく意味が分るが落第生のキャシー悟り顔な事が書いてあるが成程作らねば分らぬ物です。大体此作に限つたことでなく殊に今回の應募の殆んど全部に向つて云へることですが知らない字は調べても見たり一二度は讀みかえしてから提出するだけの眞意のな

いものが懸賞に應ずる心持はどうしたものであらう、書いた物は人が讀むことを豫想せねばならぬ以上相當責任を持たなければならぬまい、此覺悟もなしに只出して見た位の淺薄なふざけた眞似は慎まねばならぬことである。

應募數が多く一時に讀めないのですその時々之感想で探點をした結果全部比較した上では多少の不公平を免れないこと又妄評を加へて若い作者の心を暗くしたことをおわび致します。

選 後 に

上 田 英 夫

この内種には詩も歌も句も含まれて居る筈なのに、今度はどういふものか俳句の應募者は一人もなく、詩が僅か二人、あとはみな短歌といふ奇觀を呈した。そこで選後感を書かねばならぬのだが一體かういふものに點數をつけたり等級をつけたりすることは全く難事で、殊に短歌などは全體からみると餘り感心出來ないので一首か二首抜いてみると馬鹿にいゝのがある。さうかと思ふとどれがいゝどが特にいゝとはいへないが全體から見て中々腕前のしつかりしたのがある。

かういふ時は困る。そこで私達はどうかといふと、矢張主として全體的に見てゆくことにしてゐる。つまり出来るだけ作者の全體に觸れ、その實力を知らうとするのである。

今度集つた中で最も私の目をひいたのは『落葉木』と『曼殊沙華』とであつた。前者には所々に破綻がありまだ未熟の難は免れないがそれでゐて可成素直な靜かな心持が落ちついて詠まれ一首一首が滲透性を有つてゐる。かういふ作家は勉強次第ではまだく延びるであらう。前者の若々しいのに對して後者はどちらかといへば老巧(?)であつて、もはや行べき所まで行つたといふ觀がある。捉へるべきものはしつかりと捉へてゐるし、これを表現する上にも苦心してゐる痕がありありと見える。だが悲しいかなこの折角の苦心が失敗に終り往々して反つて一首全體をぎこちないものにしてゐる作も少なくない。とはいへ、腰も据つてゐるし立派なものだ。アララギ派殊に中村憲吉氏を想はせる歌風である。五高にもこれだけの人がゐるかと思ふと一寸うれしくなる。但し後半部の「曼殊沙華のころ」は觀照が足りない。

『夏の歌から』作者はいかにも樂々と詠んで居るやうに見えるしかもそれでゐて粒が揃つてゐるのは感心だ。だが私はこゝでこの作者に警告しておきたい、といふのは、かういふ境地

にいつまでも安住しないで、もつと大膽になつて盛んにいろんな對象にぶつつかつて見たまへ、いや是非ぶつつからねばならない、といふことである。『白路』總じて概念的である。

心持と詞とがびつたりしてゐない。詞ばかりが目だつてそれだけの心持がちつとも出てゐない。『初夏の夕に』心持も表はし方も幼稚である高等學校にもこんな人がゐるのかと思はれる程だ。『一人旅』歌作には一寸經驗のある人のものらしいがまだ大分あまい所が目につく。『過渡人の歌へる』は、初めの「母にあるあざ」がいく。他はいけない。獨りよがりな所がいけない。何か一癖ある詠み振りがだ。『短歌雜詠』どこか啄木を思はせる詠みぶりだが、餘り安つばい眞似をすると地下の啄木が泣くことだらう。『百日紅その他』腕前からいへば最もたしかなものゝ一つである。『落葉木』の作者などよりはたしかにある。だが、あれ程自由さのびくしがない。一寸行きつまりの姿である。型をつくらぬやうに不斷の精進を祈る『新秋私抄』まづ中位の出來か。可もなし不可もなし。詩の方の『迷へる若人の歌へる』は餘りに冗漫である。もう少し緊縮させたら何とかなるだらうと思ふ。『詩習作』は言葉ばかりが眼立つてそれだけの内容がない。詩は頭だけで作つてはいけない。魂全體で作るべきである。